
とある魔術師の誕生

そば屋の看板

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術師の誕生

【Nコード】

N3224P

【作者名】

そば屋の看板

【あらすじ】

とある少年は学園都市・・・ではなく
とある教会で目を覚めました。彼の世界と魔術が交わる時、
物語は再び動き出す。

これは能力者ではなく、とある魔術師のお話。

1個ぐらいあっても良いでしょ。魔術師のオリ主のお話。

原作重視でやっていこうと思います。

原作はいるまでにちよつと時間かかりそうです。

オリジナルの魔術も使っていきます。

第1項目 宗教家は神を利用する（前書き）

「とある魔術のクラウドさん」が開始早々、つまったのでちよつと、書いてみました。

魔術師ものです。オリジナルの魔術も使おうと思っています。

資料は基本、ウィキペディアです。

ついでに原作も1、7、9、10、11しか持っていないので間違いがあれば指摘してください。？

第1項目 宗教家は神を利用する

世界が嫌いだった

不思議なことが何一つ起こらない世界が

だから引きこもった。

他人と自分は違うと嘘をついて

みんな同じなのに・・・

ずっと世界が変わればと思っていたんだ。

午後1時 自宅

その日は朝から蒸し暑かった。

実際、町を歩く人達は皆暑そうだ。

まだ6月の初めなのに、この暑さは堪えるのだろう。

まあ、学生のくせに家に閉じこもってばかりいる自分とは全く関係ないが・・・。

意味もなく付けているTVは昼ドラの修羅場を映し出している。

空は朝から快晴だ。

何も変わらなくて、すごく日常的な光景。

それが、町には溢れていた。

すこし、イラついて煙草に火をつけた。

親の金を使って買った煙草に。

そこで突然、インターホンがなる。

訪問者確かめようと窓から覗く。

すると、訪問者と目があってしまった。これでは対応しないと失礼だ。

だいたい、平日のこんな時間に家に子供がいるのはおかしいのだ。

（居留守つかおうと思ったのにな・・・。）

そんなことを思いつつ、煙草を灰皿にねじ込んで玄関を開いた。

あんなことになるなんてこの時は、思わなかった。

俺は、入ってしまったのだ。

魔術の世界へ・・・。

第1項目 宗教家は神を利用する（後書き）

どうでしたか？

掴みはこんな感じかなとおもって書きました。

訪問者はいったい誰でしようかね？

では次作に続きます。？

第2項目 神を信じない者に救いは与えられない(前書き)

1日のうちに2話も投稿するんなら
初めから書けばよかったですね・・・。
でも集中力ないですし、まあいいですか。
それでは、始まり。

第2項目 神を信じない者に救いは与えられない

ドアを開けると、そこには真っ黒い修道服を着た女性が立っていた。

しかも、長袖長スカートで立っている。

両手には白い手袋がに覆われていた。

歳は自分より2、3歳上の人かな。と勝手に推測する。

「あの・・・」

暑くないんですか。とアホな質問をする前に女性が声をかけてきた。

「あらっ。恐れ入りますがご両親はご在宅でございましょうか？」

とてつもなく丁寧な日本語だった。この人、外国人か？

見た目や瞳の色から勝手に外国人と決めつけると

まるで、練習したかのような早口で話した。

「うちはシングルマザーで、母親は海外に長期出張中ではありません」

すると、その女性は突然「神の教えに興味はありますか？」

と言ってきた。会話が噛み合っていない。

「いや・・・」

しどろもどろしていると、女性がまた先制攻撃を仕掛けてきた。

「あっ。申し遅れました。私、ローマ正教のオルソラ・アクィナスと

申します」

またまた会話が噛み合わない。

（なんだ、この人。意志疎通がまったく出来そうな気がしない）

そんなことを思いつつ、向こうが自己紹介したんだし

こちらもしないと、失礼だと思い自らの名を発した。

後に、魔術史で語り継がれる名を。最強の魔術師の名を・・・。

「えっと俺の名前は、和田大輔わだだいすけだ。よろしく」

大輔が名前を言うと、真っ黒シスターもといオルソラさんもとから笑顔だったのが、120%の笑顔になって握手を求めてきた。

「こちらでは、握手が一般的な友好の印だと聞いたもので」
だそうだ。初めて会話が成立した気がする。

「そうですか」

美人(?)との握手に少々とききしてしまうのは、中3男子としては

仕方ないことだろう。

「では、本題なのですが・・・」

ここから、きっと会話が成立していくだろう。と安易な憶測をたててなんだろうか?と尋ねるとオルソラさんは、笑顔のまま質問してきた。

「ご両親はご在宅でしょうか?」

爆弾発言しやがった。前言撤回。この人とはやっぱり会話が出来なさそうだ。

これが俺の魔術の世界への第1接触だった。
ファーストインパクト

第2項目 神を信じない者に救いは与えられない（後書き）

いかがでしたか？

オルソラさんを出しました。

原作では日本に來た回数は書いてませんでした（あくまで僕の記憶上は）

日本語喋れてましたし、何回か行ったことがある。

という勝手な憶測をたてました。ごめんなさい

ちなみに、オルソラの紹介文は原作とカブっております。

ご了承ください（笑）ちなみに、年齢も推測です。

推測だらけです（笑）知ってたら教えてください。

オリ主の名前は普通なのを選びました。

皆さん個性的な名前を付けてますが悔いはありません（笑）

長々と後書き書きましたが、今日はこの辺で

では、さようなら。

第3項目 私は始まりであり終わりである（前書き）

頭の中でシナリオがどんどん生まれてきます。

1日に3話投稿しちやいます。

今回こそ教会にたどり着ければいいが・・・

第3項目 私始まりであり終わりである

午後2時 自宅

「だーかーらー。両親は長期出張で海外って言ってるでしょうが！」
オルソラさんと出会って40分。

家に招き入れてから20分がたっていた。

初めのほうは他人行儀な（まあ他人だが）敬語を続けていた俺も、
話す↓会話を成立させるという初歩的なコミュニケーション
をなんとか、成功させようとするうちに
その仮面もだいぶ剥がれてきた。

（さっきから全く会話が成り立たない……。どうすればいいんだ
あああ！！！！）

そんな俺の思いをよそに、オルソラさんは俺が出した
来客用の菓子を満面の笑みで食べているところだ。

「こちらの和菓子はとてもおいしいですよ。一口どうですか？」

と、オルソラさんが自分が食べた和菓子の

一つを差し出してくれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・甘いものは嫌いだからいい」

本当は、ちょっと食べてみたい。いわゆる間接キスだし。

そんな欲望は取っ払って本題に入った。

「で、オルソラさんは神の教えである十字教に入れと言ってるだよ
な」

もう面倒なので、タメ口で話す。

「あっはい。そうなのでございますよ。だからご両親はおられます
でしょうか？」

何回目の質問だよ。という言葉は飲み込んだ。話が進まないから。

「海外出張でいないから、俺が伝言しとく」

「そうでございますか」

あれ？・・・以外に簡単に終わったぞ。

「では私は他のほうも回らないといけないので」

律儀に頭を下げて玄関の方に向かうオルソラさんを横目に俺はなんで、あんな簡単にオルソラさんが引き下がったのか考えていた。

（急な用事でも出来たのか？なんでだ？？わからん）

しかし何故かとぼとぼと歩くオルソラさんがとても寂しく見えた。まるで、道ばたに捨てられた子猫のような感じの・・・。

俺の心はついに折れた。

「話聞くからここにもうちよつと居てくれない？オルソラさん」

すると、彼女は振り返り満面の笑みで椅子に座った。

そしてまるで小さい子供に言い聞かせるように

神の教えとやらを俺に説いてくれた。

そこからは、寂しいオーラも出ていなかったがそこで俺は気づいた。

（はっ・・・計られた！！！）

女の罠は怖いものだとはじめて知った。

わざと、寂しいオーラを出したら俺は絶対話しを聞くと考えたのだろう。

「異国の地で神の教えを説くのが私の仕事ですから」

オルソラさんは、延々と話し続けた。

3時間も・・・。

第3項目 私は始まりであり終わりである（後書き）

オリ主の名前が出たので3人称から1人称に変えました。
読みにくかったらすいません。

次はイギリス清教のターンです。ついに教会に行けますかねえ。
ではまた今度。さようなら

第4項目 神学者と科学者は紙一重である（前書き）

お久しぶりです。最近、小説家気取りのそばやの看板です
後書きが自分でもウザくてウザくて（笑）

第4項目 神学者と科学者は紙一重である

午後5時
自宅前

3時間も俺に、神の教えとやらを説いたオルソラさんはお肌がツヤツヤになって、普段より輝いて見えた。

まあ俺の方は、興味も無いようなことを延々と聞かされて
まるで、ゾンビのようなヒドい顔になっているのだが、，，，，，

「では、また明日伺います」

笑顔で俺に、そう告げるオルソラさんは夕焼けに照らされとても綺麗だった。

まあ、俺にとっては死刑宣告だが、
、
、
、
、
、

「マジで？」、明日も来るの？これ以上、神の教え聞いたら死にそうだけど、」

「教えはとも良いものですから死にはしませんよ」

にっこり笑顔で首を傾げているオルソラさんには、俺の泣き落とし作戦は

通じないようだ。

「では、さようならでございますよ」

「ああ送っていいこうか？　まだ、
明るいけど、
、
、
、
、
」

こちら辺は、結構治安が良いが少し都会のほうに行くと不良どもがたむろしている。

「そんな、私はいまからホテルに行くのですよ。殿方と一緒になん

耳まで真っ赤にしたオルソラさんは、そう言った。

「いやいやいや! ? 俺、別に変な意味で言ったわけじゃ」

焦つて弁解するも、やっぱり氣恥ずかしい。

「フフッ冗談でございますよ」

いたずら小僧っぽい笑みを浮かべると、オルソラさんは

家の前の曲がり角をさっさと曲がっていった。

（ハア．．．．．からかわれたのか俺。なんかすごく疲れた）

そんなことを、思いながら家の中へと入った

まあ、明日も会えるとなると、やっぱり嬉しかった。

美人で可愛いし．．．．

彼はまだ知らない。明日が彼の運命を変える日になるとは。

このときは、まだ．．．．

第4項目 神学者と科学者は紙一重である（後書き）

どうでしたか？

なんか、毎話ごとにどんどん台詞が減っているんですよ（笑）

まあ俺の経験不足ですかね。

さて、オルソラさんをこんな時期に出したのには、ちゃんと理由があります。

インデックスの代役をしてもらいたかったんですよ。

それ以外に、理由はありません！！（笑）

次回は、炎の魔術師がです。では、またの機会に。

第5項目 神のモデルは人間である（前書き）

どうもお久しぶり（？）です。蕎麦屋の看板です。

最近、禁書目録の2期と1期の作画が違いすぎると友人に報告したところ

「ハア！？どこが違うの？」とキレられました。我ながら痛いor

z

第5項目 神のモデルは人間である

午前10時 自宅

大輔は盛大にそして不愉快きまわりないびきをかいて寝ていた。実は近所の知り合いに「音が漏れて寝れません」と真面目にお説教されたばかりなのだ。

しかし、寝ているのなら止めようにも止められないし本人が止めようと努力していないので、仕方ないのだが…….なかば引きこもりの大輔だが、近所付き合いだけはキッチンとこなしている。

それでも、学校に行っていないのは公然の秘密だし近所もあまり気にしていないようで（一部かなり気にしているが）普通に接している。それでも、たまに居留守を使ったりするのだが…….

「ピンポーン」

良い感じに爆睡していた大輔はテンプレートなチャイムの音に気づかない。

しかし、来客者は諦めず何度も何度も連打をしてきた。

「こんな朝っぱらから誰だよ……..」

そこで、やっと来客者に気づいた彼は、玄関へと向かった。

「はいはい。今開けますから連打すんのやめてくださーい」

警戒もせずにドアを開けたのは来客者がオルソラさんだと思ったか

らだ。

「・・・・・・・・・・!？」

しかし、来客者は思っていたよりずっと大きかった。

神父のような服を着た人というよりも、彼にはそれが人だとは思えなかった。

まず、長身で髪は染めたように真っ赤になっていた。

そして、眼の下にはバーコードのようなもの。指にはドクロの指輪が両手に

填めてある。そして、なにより「空気」が違った。

大輔は、地面に縫いつけられたように動けなくなった。

嫌なアセが体中から出てくる。そこで来客者は言った。

「君が彼女の息子だね。ああ警戒するのも無理はないが僕は君の敵ではないよ」

そんなもん信じられるかと心の中で呟く。体はまだ動かない。

「とりあえず、ここは危険だから少し外に出ようか」

その言葉を聞いた途端、体中に電流が走ったように彼は外に走り出した

第5項目 神のモデルは人間である（後書き）

とりあえず、ここで終わり。

ちなみに男はステイルの事です。

第6項目 裏切った13番目（前書き）

今までP S 3からの投稿でしたがなんか
P C買えるかもしれませんね。まあ、期待せず^ずに待ってみましょう。

第6項目 裏切った13番目

午前10時02分 自宅

急いで玄関から離れた俺は一瞬驚いた。

壁や道路によく分からない記号のようなものが貼り付けられていたからだ。

しかし、立ち止まっている時間など皆無なわけで、俺は走り出そうとする。

すると、さっきの赤髪ピアス神父もどきが声をかけてきた。

「はあー。めんどくさいから説明を省くけど僕は君の味方だよ」

受け答えるほど俺は馬鹿ではない。無視して走り出した瞬間、目の前が「爆発」した。

「逃げられれば、僕も上からお説教されるんだ。おとなしく捕まってくれ」

やる気のない声が聞こえたと思うと、俺は数メートル後ろに吹っ飛んでいた。

（いったい何が起こったんだ！？マズイ逃げないとほんとに殺される）

頭でいくら命令したって地面から1センチも動けない。

ゆっくりと煙草を啜えた赤髪ピアス神父もどきが近づいてくる。

「頭の芯が揺さぶられて上手く動けないだけだよ。まあ僕としては

そっちの方が簡単だけどね」

耳鳴りが鳴ってきた。そのくせ奴の声だけは聞き取れる。
畜生、畜生、畜生、畜生。

「な…めてんじゃ…ねえよ!!」

無理やり体を起こした。ほとんど気力でやったことだ。

その証拠に体のあちこちがもう座りたい、寝転んでしまえ。と言っているように聞こえる。

「ふうん。僕の炎剣をあれほど至近距離で受けて立てたのは君ぐらいかな」

「やっぱり、君は彼女の息子だね」

何を言ってるのかさっぱり分からない。息子？コイツ母さんの知り合いか？

絶対ありえない。うちの母親は男遊びは激しいが駄目な奴や冗談が聞かない奴はきちんと分かっている・・・と思う。

（ダッシュで逃げるか。いや、無理だ。もっかいアレ食らったら正直、失神するな）

そんなことを考えてると、赤髪ピアス神父もどきが何か唱え始めた。

「灰は灰に塵は塵に・・・」

俺は身構える。今までフラフラしていた体をしっかりと地面に立た

せ、真っ直ぐ

赤髪ピアス神父もどきを見つめる。

「吸血殺しの紅十字!!」

目の前で炎の十字架が生まれた。しかも、驚きなのはそれを素手で掴んでいる神父もどきだ。

やばい。怖くてまったく動けねえ。

「悪いね。僕も仕事なんだ」

軽く神父もどきが笑ったと思った後、炎の十字架を投げる体制に入った。

そのとき、曲がり角からオルソラさんが軽くスキップしながら出てきた。

それに、気づいた神父もどきは驚くことに俺を嘲笑ったような表情から

急に真顔になり、炎の十字架の向きをオルソラさんに向けた。

そして、そのままオーバースローで投げた。

「逃げろ!! オルソラ!」

気がついたら俺は走り出していた。

神父もどきがいる距離と俺の距離なら俺のほうが圧倒的にオルソラに近い。

「ふえ???」

まぬけな顔で俺の方を見るオルソラ。炎の十字架を見ろって。

「うおおおおおおおおおおお！！」

気がついたら叫んでいた。十字架との距離はほとんどない。

オルソラを抱き上げて逃げようとしたら2人とも、炭になるのがオチだ。

少年はオルソラを抱きしめるようにして炎の十字架との間に入った。その後、炎の十字架と少年の背中が接触した。

第6項目 裏切った13番目（後書き）

どうも蕎麦屋の看板です。久しぶりに長めに書きました。さてさて、大輔君死亡しました。嘘です。では、次回に期待してください。

皆さんの応援やコメント・アドバイスがちらなります。

第7項目 隠された財宝と無情の火（前書き）

初めて、コメントを頂いてヤバイほどテンションが高いそば屋の看板です。

やっぱPC投稿は楽でいいですね。PS3は改稿みえないし全体も見づらいですし・・・

そんなことは、置いといて第7項目始まり始まり。

第7項目 隠された財宝と無情の火

午前10時05分 自宅前

炎の神父ステイルは驚いていた。目の前のローマ正教の少女ではない。

それを、庇った少年にだ。ステイルの炎の十字架は双剣のようになっている。

片方の炎剣をもう片方と束ねて投げたのだ。つまり、少年は2本の炎剣を食らっても

「溶けず」に少女を庇ったのだ。

「バカな……。いったい何をしたんだ……。たかが一般人の少年に僕の炎剣を防がれるなんて」

しかし、ステイルの呟きなど、もう少年には届かない。

（畜生……。頭いてえ。つか背中が空気に触れて痛いなあ……。）

痛み……。というか背中を丸焼きにされた状態で感覚があること自体が【異常】なのだ。

しかも、頭は妙に冷静だ。

人は危機的状況に陥って自分の容量を超える事態が起これるとそのこと自体を考えることをやめてしまう。

妙に冷静になるのはそのためだ……。と勝手に考える。

「オルソ……。ラさん。早く……。逃げて」

なんとか、口を動かしてオルソラさんに逃走を促がす。

しかし腰を抜かしているのか、へたと座り込んでまったく動けないオルソラ。

そこで、神父もどきが近づいてくるのが視界の隅に見えた。

「早く・・・オルソラ!!」

なかなか我に返らないオルソラを一喝すると、オルソラは俺の背中を見て焦り始めた。

「なんでございましょう!! 背中が・・・少々お待ちを!! 救急車を及びいたします!」

「呼ばなくて・・・いいから・・・さっさと逃げろって」

もう近くに神父もどきがきてんだよ。早く逃げろ。殺されるぞ。

「なにを言ってるんでございます! もしも救急s y! ?」

俺の携帯をズボンから取り何とか電話をかけようとした矢先神父もどきが、俺の携帯をオルソラから取り上げた。

「まさか・・・服までも無事で済んでるなんて・・・いったい何の術式なんだい? コレは」

オルソラさんは神父もどきに気づき、俺と神父もどきの間に入ってまるで盾のように両手を広げた。

「彼を・・・殺すなら・・・私から殺すのです」

神父もどきはため息をはきながらオルソラさんを横に強引にのけた

「君は必要ないんだ。必要なのは・・・」

「この少年でね」

ステイルは俺の肩に片手を置き、もう片方の手でカードみたいなものを貼った

「おっと。君は動かないほうがいい。すでに魔方陣は完成してるんだ。円の中に入ろうとしたらその場で炭になるよ」

近づいて俺を助けようとしていたオルソラさんはその言葉に固まった。

「じゃあね。君を殺さないのは慈悲じゃない。面倒事を増やしたくないからだ」

その言葉とともに俺はゆっくりと瞼を閉じた。

最後に見たのは俺に必死に手を伸ばしているオルソラさんの姿だった。

第7項目 隠された財宝と無情の火（後書き）

ここまで来るのに長かった。まだ原作には入れませんが皆さん飽きないで見てくださいw

やはりなんとなく説明文が多くなりがちですね。軽く読めたほうがいいんですがねえ。

では次こそ教会へ！！

次回をお楽しみに。

皆さんのコメント・アドバイスがやばいほど力になります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3224p/>

とある魔術師の誕生

2011年10月8日10時14分発行